通信第六十四号　病気をご縁として

　五月六日夜、以前から出にくくなっていた小便がとうとう出なくなりました。七日は日曜日でしたがご門徒さんのくぼたクリニックに電話すると「すぐに来たら何とかします」ということで四十分かけて法喜さんの運転でかけつけました。途中でのことです。法喜さんの「どんな痛み？ひりひりするの？？」との問いにえられません。法喜さん「そうか、私には無い世界だからわからないよね」その時、私は如来さまの御慈悲、御智慧、御痛みの世界もうかがい知れる世界ではない。三界を超えた世界だものと思わされました。

　病院では先生がドアを手動であけられて迎えてくださいました。尿を入れる袋を下げての生活が四日間続きました。ちょうど長年の腰痛と重なり、痛みのために食欲がなくなり、おなかに力がはいらないためか声がかすれてしまいました。袋は取れましたが腰痛とだるさが二十六日間続いています。

　十五日の愛知県、本願道場、十六日の三重、松林寺本願道場は中止となりました。静養してじっくりと体を回復するようにとのことです。皆様のお顔が浮かびますがどうにもなりません。

　早速、刈谷の同行さんから手紙が来ました。

　　南無阿弥陀仏　先生お元気ですか。僕も元気です。五月十五日月曜日に先生が来るのを楽しみにしていました。残念です。身体のほうは、大丈夫ですか。僕は、先生に遇うのを楽しみにしています。

　　　五月三日に岐阜本願道場で徳号の慈父、光明の悲母を分かりやすく教えてくれました。僕は先生に救いの因を教えて頂きたいと思っています。今度遇うのを楽しみに待っております。身体を大事にしてください。いつも通信を送って頂き有難うございます。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

　令和五年五月十三日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大村祐司

　祐司くんは亡き水本健太郎さん（刈谷の御法座の創始者）の子さんです。幼いときから健

太郎さんからどんな境遇にあろうと、前向きに堂々と生きてゆくことを仕込まれています。三

十年連続の勤労表彰も受けられています。遠慮なく単刀直入にご質問をして下さいます。

私は嬉しくてすぐに返事を書きました。

　　前略、お手紙ありがとうございました。大変元気づけられました。休養することが仕事であ

ると聞いてそうだなと知らされました。

救いの「因」について問いがありましたね。涅槃（大安心）の真因は信心であるとの親鸞さまのお教えであります。

　本願が信じられたら必ずお名号がれて下さいます。普通私たちの因は無明が因となっています。病気などを縁として、因の無明が表に出て暗くなるのです。因が光明になると病気しても暗くなりません。自分でもわからない一番奥にある世界が、一番表に出て来るのです。

　　私も祐司君とお遇いすることが楽しみです。人類の真に救いと成る本願のみ教えを聞かれる人が極めて少ないです。しかし、全くないわけではありませんね。ありそうでない人もありますし、なさそうである人もおられます。仏様、先生方、先輩方のご苦労がばれます。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ではまた、常照拝

　また、次のような元気の出るお手紙を頂きました。

　　通信六十三号、長仁寺報第二十号有難うございました。

　　　厳しくも尊いみ教え、下げた頭を上げる事が出来ないほど響いてきました。五月十三日は大石先生の祥月命日でした。先生の書信集を読んだり、先生の事をいろいろ思ったりしていました。

　　　十四日は母の日、母の日を前にして子供達からのプレゼントを期待している私自身の姿が照らし出されました。十四日、いただいたプレゼントに百パーセント満足していない私自身の姿が又もや照らし出されました。大石先生から、「それが本当のあなたの姿だ」と言われたような感じでした。

　　　他人には良く見られたい、他人には求めてばかりいる私でした。どうにもならない、救いようのない私自身の姿が照らし出されたのです。ところが不思議に救いの手がさし伸ばされてきたようで、気持ちが明るくなりました。

　　　救いの手立ては如来さまの方にしかないとの事ですから、「お念仏に救われたらすべての事が必然のご因縁と成らされます」とお導きいただきました。今までのいろいろのことが必然のご因縁とならされ深くお礼が申されます。有難うございました。

　　　お浄土の中で、浄土へ浄土への日々を過ごさせていただきたいと思います。お育てをいただきまして有難うございます。今後とも宜しくお願い致します。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

　　　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

　　五月二十一日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　秋田県由利本荘市　　　小関　真智

　小関さんは坊守様です、近くに高橋つねさんという現代では珍しい念仏者がおられます。ひご

ろお二人の間にご信心話の交流があることはうかがっていましたが現代では珍しいことです。

　痛みの中で大石先生が前立腺肥大で入院された時の事や口腔低癌の手術の時のことが思わさ

れます。先生は病気をご縁に本願にされ、その中で本願に生かされきりました。背景には

先生の生れもった資質、回天搭乗員での生活、そして法林寺での三十八年間におよぶ厳しい生活

があります。その厳しさは私にはうかがい知れません。大石先生がベットの中で長男、一朗さん

の嫁である恵美子さんに、同行さんから来た手紙を読んでもらい「こういう手紙が一番元気が出

る」と仰せられたことを思い出しました。不思議なご本願のおはたらきが私にも生きているよう

でうれしかったです。

五月二十三日は大石先生の奥様であられる、恒子さまの三回忌でした。永代供養墓の前で法喜

さんと二人で「願生偈」を読経させて頂きました。私たちにとっても魂の本当の父母のようで

あったことなど話し合いました。また、肉親の父母にも合掌してお礼が申されます。藤解先生

が「本当に救われたらまず親、先祖にお礼が申される」との仰せ、その通りであります。

　二十四日朝、報告がてら大石一朗さまへ電話をさせて頂きました。三組のカップルがそれぞれ

の家で母を偲ばれたとのこと、そして、印象に残ることを聞かせて頂きました。六月二日に一朗

様よりそのときのことを以前文章にされたコピーを送って下さいました。引用させて頂きます。

ここ数年、示朗たち家族は、示朗自身が難病にかかるなど、いろいろと苦しい時期が続いています。そのことが頭にあったものですから、一緒に母を訪ねたとき「示朗のところは大変なんよ。この後東京に帰るから、何か一言、励ましの言葉でも書いてやりんさい」と母に水を向けました。。母は「大変なことと言うと、何かあったの？」「どうしたの？」などとは一切聞きません。

現在の母に、まとまった文章を書く力はありませんが、簡単な文章ならもしかしたら・・・と思ったのです。手元にあるのは、示朗の妻の慶子さんがハンドバックから取り出した使用済みの封筒とボールペンだけ。

　　母はボールペンを手にしたまま、封筒の裏の空白のスペースを見つめて、眉間にしわを寄せて考え込み始めました。２～３分もたったでしょうか。しびれをきらした形で私が口を開きました。「なんでもいいんよ。がんばりなさい、とか一言書けばいいんよ。漢字を思い出せんのだったら、ひらがなでもいいよ」。そんな言葉は耳に入らないかのように、母は真剣な顔で封筒をにらんでいます。

　　そして、やおらボールペンを走らせ始めました。決して早くはないけど、よどみのない筆遣いです。一円玉くらいの大きさの字を、一文字ずつ刻み込むように書いてくれました。

示朗君へ

　　こんな母親なのに

　　よく慕ってくれてありがとう

　　　　　　　　　　　　　恒子

～～～

　　母がそれを書いた直後、示朗と慶子さんが言います。「これを書いてもらっただけで、このたび広島に帰ってきたかいがあった」。私も「これは、示朗宛てになっているけど、三人に対しての母の懺悔の気持ちだな」。東京に帰った示朗たちは夫婦は、その封筒の母の走り書きを、に入れてリビングに置いたそうです。

恵美子さんのお母様は毛筆が上手なので書いてもらい、一朗さん達も大石先生の部屋に飾っておられるとのことです。何か私達にも頂いたようで心温まる余韻を頂きました。

　二十七日、長仁寺聞光道（本願道場）においてそのことを皆さんに聞いていただきました。日田市からご参加の原さんが「何か心が重たかったのが軽くなった」とお念仏されながらばれました。

　その日の夜のことです。

「こんな母親なのに　よく慕ってくれてありがとう」

「常照、お前の自覚はどうだ」。

とご廻向さまがありました。さらに、即座に

　「真反対じゃろうが」と藤解照海先生のみ声が入ってきました。ご本願様に導かれ、育てられどうしの有様に後の言葉が出ませんでした。

　五月二十九日、午前〇時二十分とメモ書きがあります。

　　本願（念仏）をお伝えするためにを頂いた

　　本願をお伝えするために何でもする

　　願いに生きる

夢から覚めてさっと書いて寝てしまいました。

　三十日、朝のお勤めの時、大石先生の次のご文章に遇わされました。長年惹かれつつ、眼に見えない厚い壁があったご文章です。

　　本当の私、真実の自己とは、そも何ものか。肉体を超えた私というものがあるのか。それは私が認めると認めざるとに関係なく、生前死後を貫いて生きて下さっている偉大な生命なのです。その偉大な生命は抽象的な真理というものではなく、迷いの私を救い得る徳を成就されている人格的なものなのです。底下の凡夫という自覚の場においてのみ、感知し得るので、「迷いの私」を救いたいと願いを起こして下さったとわかるので、一度その願いが届いてくださったら「光明に摂取」されますから、人格的な御智慧、御慈悲、活動の本体と信じられるのです。その本体に生かされると、おのずから感謝の気持ちが湧き出て下さいます。「助けてやっておるぞ」という仏様のお呼び声と、「有難うございます」という私の方からの感謝の気持ちが、一つになって出て下さるのが「南無阿弥陀仏」なのです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大石法夫先生　書信５４❘１４

　その日、くぼたクリニックへ宇佐市までゆく車中での事です。

　　　大地、水、太陽、空気、樹々、人間などなど

　　煩悩、おんもよおし、この痛みもすべてご廻向

　　如来さまの御慈悲、御智慧から私を救いたいという願いの中から来て下さっている

　　この心身も賜っている

と聞こえてきました。

　翌日、三十一日の夢に、ご門徒を引き連れて去って行かれた方が、白いワイシャツを着てにこにこされながら、こちらを見ておられる姿があらわれました。

　　法喜さんに朝食をしながら聞いてもらいました。

　ご本願に遇わせて頂くと、どのこと一つも無駄なことは無くなる。ご本願に遇わせて頂くためだったと成らされる。永遠の過去から永遠の未来まで、今も。無駄なことは一つもない。ここを通って、お浄土参り。お浄土の中で、浄土へ浄土への日々。この病もそうでした。

　　　仏の本願力をずるに

　　うてしく過る者なし

　　　く速やかに功徳の大宝海を満足せしむ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　浄土論（願生偈）

令和五年六月初旬

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝